

Oct. 9 2009

JEKS (The Japan Electronic Keyboard Society)

News Letter

No.8

日本電子キーボード学会ニュースレター ～日本電子キーボード学会「第5回全国大会」案内号～

目 次

1. 第5回全国大会概要	2
2. 大会スケジュール	3
3. 会員の声	
「電子オルガンとの出会いからKオケまでの活動記録」	
河村義子(Kオケ主宰)	4
「電子楽器開発者から見た電子オルガンアンサンブル」	
協賛会員 宮城雄介(株式会社コルグ)	6
「電子オルガンを通して、よりソルフェージュの楽しさを」	
学生会員 酒井 隆博(昭和音楽大学)	7
4. 海外情報	8
①イタリア・ローマの歌劇場の電子キーボードによるオペラ上演	
②韓国・ソウル室内オペラフェスティバルでの電子オルガンにへのKBSのコメント	
③アメリカ・TED (Ideas Worth Spreading) にみる電子オルガンに対する反応	
5. 事務局から	
学会誌「電子キーボード音楽研究」原稿募集	8
編集後記	8

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1 昭和音楽大学内 阿方 or 生頼気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

H.P. : <http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/> E-mail : jeks@snow.ocn.ne.jp

第5回全国大会について

2009年11月8日(日) 10:30~19:30 文教大学越谷キャンパス

今年度大会は先日お送りしました次ページのチラシのように開かれますが、以下、アクセスや本大会の特徴についてのインフォメーションです。

1. 本大会内容の特色

- ・ 基調講演：講演者の古山俊一氏は、電子楽器・機器に関する解説の第一人者で、業界誌「ミュージックトレード」に300回近い連載を執筆中。尚美学園大音楽メディアコース主任教授
- ・ パネルディスカッション-1：パネリストに和智正忠(元ヤマハ電子楽器製作責任者)、三枝文夫(コルグ開発責任者で、日本で最初の電子楽器設計者)というハードの第一線に携わってきた人に電子オルガン演奏の第一人者、森下絹代さんが加わり電子オルガンの音を追求
- ・ パネルディスカッション-2：パネリストに岡崎豊治、赤津裕子、脇山純という現場でM.L.を活用している第一線の指導者による教材研究。伴奏づけや鍵盤楽器基礎技能などを中心にM.L.授業のためのテキストのあり方を討議
- ・ 研究発表：音大の授業におけるハイブリッドオーケストラの実態紹介やM.L.を用いた授業をアンケート調査(担当講師および受講生)を通して調査・分析するなど電子キーボードの現場から、電子楽器を100年のスパンで考えてみようというものまで例年以上に多彩
- ・ 研究コンサート：文教大学の管楽器アンサンブルは、コンクールで全国優勝を数多くするなどそのレベルは高い。ここでは、オーケストラ作品の弦楽器パートを一段電子キーボードで担当し、ハイブリッドオーケストラとしてさまざまな演奏スタイルを試みる

2. 大会参加費

学会員は、正会員=1,000円、学生会員=500円で、一般参加希望者は、非学会員=3,000円、非学会学生=1,500円となっており、懇親会費も含む懇親会費も含んでいます。

3. アクセス

- ・ 文教大学には越谷キャンパス(教育学部、人間科学部、文学部)と湘南キャンパス(情報学部、国際学部、女子短大)があり、全国大会は教育学部のある越谷キャンパスで行われます。住所は埼玉県越谷市南萩島3337
 - ・ 北越谷駅(東武伊勢崎線、東京メトロ日比谷線、半蔵門線直通乗り入れ上野から35分)西口下車徒歩10分と案内されていますが、乗り継ぎなどがありますので、ご注意ください。
 - ・ 大会当日は、西口出口に案内人がいますので、お尋ねください。事前に地図を入手されたい方はインターネットで越谷キャンパスの住所でアクセスできます。
 - ・ 当日の会場は12号館ですので、ご注意ください。インターネット地図で川を渡ったところから左折した方が近いです。
- * 大会当日は休日のため学食が開いていませんので、昼食はご持参ください。 駅近くにコンビニなどがあります。なお、飲み物は学内に自動販売機があります。ご不明な点がございましたら、事務局までお問合せください。

日本電子キーボード学会 第5回全国大会

<スケジュール>

10:00	受 付(12号館ロビー) 午前中の会場 (12号館 12101室)		
10:30	あいさつ: 西 義一(文教大学教育学部長) 柳田孝義(学会代表)		
10:45	基調講演 “コンピュータと音楽 その魅力を探る” 古山俊一 (尚美学園大学教授)		
11:30	総 会		
12:00	昼 食		
	パネルディスカッション		
13:00	パネルディスカッションー1 (12号館 12101室)	パネルディスカッションー2 (5号館 516室)	
	電子オルガン関連 “ハードからみた電子オルガン演奏 の新たな側面” ～演奏の現状に対する課題と提案～ パネリスト: 和智正忠、三枝文夫、森下絹代 司会・進行: 柴田 薫 記録: 海津幸子	M.L.関連 “M.L.授業のためのテキストを考える” ～伴奏づけや鍵盤楽器基礎技能 などを中心に～ パネリスト: 岡崎 豊治、赤津裕子、脇山 純 司会・進行: 冨田英也 記録: 森 直紀	
14:30	休 憩		
	研究発表		
	Room-1(12号館 12101)	Room-2(12号館 12102)	Room-3(5号館 516)
15:00	研究発表①佐々木果奈 ハイブリッドオーケストラの 現状と課題	研究発表④金銅英二 映像から検証する電子オルガン (オルガン)の音楽表現について	研究発表⑦小倉 隆一郎 ML 授業における授業カリキ ュラムの見直しとその効果
15:30	小 休 憩		
15:40	研究発表②河村義子 単旋律演奏による電子オルガ ンオケへのアプローチ	研究発表⑤諸井野ぞ美 電子オルガンのためのエチュー ドのあり方を考える	研究発表⑧坂本明子 「地域に広がる電子キーボ ードによる音楽活動」
16:10	小 休 憩		
16:20	研究発表③清水徳子・前田栄子 アジア・パシフィック電子オル ガン交流週間のもつ意義	研究発表⑥ハード (三枝文夫) どこまで真似るか真似なか・・・ 電子鍵盤楽器の100年	研究発表⑨森 直紀・森崎貴敏 社会の多様化に対応した M.L 活用による音楽教育を考える
16:50	休 憩		
17:10	研究コンサート(13101)		
	プログラム ハイブリッド・オーケストラ (電子キーボード8台とブラス・打楽器) によるアンサンブル ① Mozart “フルート協奏曲” ② Sibelius “フィンランディア” ③ 柳田孝義 “ピアノ協奏曲” ④ Schubert “魔王” * 電子キーボードは文教大学教育学部学校教育課程音楽専修4年生を中心としたメンバー		
18:00	懇親会(学食 2F)		

電子オルガンとの出会いからKオケまでの活動記録

河村義子(K オケ主宰)

今年度の第5回全国大会で研究発表の機会をいただきましたが、事務局の方から今までの活動記録を書いてみてはどうかというお話があったので、以下Kオケの活動記録を、とき、ところ、使用電子オルガン機種、主要演奏曲目、コメントでリストにまとめてみました。

Kオケの名前の由来は、主宰者の頭文字とキーボードのKからとりました。メンバーはピアニストを中心としたグループで構成されています。

同様な活動をされている方々と情報交換を求めています。よろしくお願いいたします。

とき・ところ・使用楽器	主要曲目・コメント
昭和 60 年 大垣市文化会館ホール テクニクス SX-F3	グリーグ：ピアノコンチェルト 同じ職場の電子オルガン奏者中島百合子さんの演奏を初めて聴きカルチャーショック。このコンサートのあと、ピアノのある喫茶店でも同じ曲を演奏
昭和 63 年 大垣フォーラムホテル 名古屋電気文化会館 HS-8 とピアノ 2 台	サンサーンス：動物の謝肉祭 ガーシュイン：I got rhythm (中島百合子アレンジ) 中島百合子：魔女のダンス この頃から、私の主宰するかすみの会の、サルーテムジカ (ジャンルを問わず楽しいコンサートを出張で行う) にも電子オルガンを取り入れ始めた
平成 6 年 大垣市文化会館ホール EL-90 とピアノ	ベートーヴェン：ピアノコンチェルト「皇帝」 EL-90 のはじめての挑戦。あまり音色にもタッチにも関心がなく、ただ一緒に弾くということにとどまっていた。
平成 16 年 大垣市立安井幼稚園 ステージアとピアノ	「冬ソナ特集」「平井堅の瞳を閉じて」「千と千尋の神隠し」など ステージアは、タッチによって、音色が変わり、表現がとてもしやすくなっていた。私の中で音楽の幅がグーンと広がり始めた
平成 17 年 大垣西中学校の体育館 ステージアとピアノ	オペラの名曲や序曲 歌手は持続音と持続音による音の盛り上がりが出せるステージアに興味をもつ。しかし音の立ち上がりが弱いので、ピアノとの組み合わせで使用
平成 18 年 大垣市スイトピアセンター音楽堂 ドリマトーンとピアノ	～3大B～ (バッハ、ベートーヴェン、ブラームス) この年、毎年参加する大垣音楽祭のステージに初めて電子オルガンを導入 バッハ：トッカータとフーガ ベートーヴェン：交響曲“運命” ベートーヴェン：ピアノコンチェルト“皇帝”
平成 18 年 瑞穂市サンシャインホール ステージアとピアノとパーカス	音楽とバレエでつづる午後のひと時“くるみ割り人形”(抜粋) ピアノ連弾、ステージア、パーカスによる編成のアレンジ。 バレエと語り付き
平成 19 年 サラマンカホール 音楽と絵本カーニバル ステージアとピアノとパーカス	語りと音楽による“くるみ割り人形”(抜粋) ピアノソロ、ステージア、パーカスによる編成のアレンジ サラマンカホールは岐阜県の誇る音楽専用ホールで700人の座席数。今回が、ステージアのサラマンカホールへ初出演。
平成 19 年	大垣音楽祭 かすみの会コンサート ～かすみカンタービレ～

大垣市スイトピアセンター音楽堂 ステージとピアノ	“ウィリアムテル序曲” “カルメン幻想曲” “ラプソディ・インブルー” ステージの音色、迫りに皆、電子オルガンのイメージが変わったと絶賛
平成 20 年 大垣市スイトピアセンター音楽堂 ステージとピアノとフルートとソプラノ	大垣音楽祭 かすみの会コンサート ～春 花の調べ～ “スマレの花咲く頃” “春の海” “春の声” “花のワルツ” ソプラノ、ピアノ、ステージ、フルートによる競演 ステージは、歌の伴奏に、フルートの伴奏に、もちろんソロの演奏にと大活躍 PA は使わない生音
平成 20 年 坂下公民館 ステージとピアノとパーカス	くるみ割り人形 ・ラ・フィエスタ ・ラプソディ イン ブルー 中学生対象の音楽鑑賞会。前半は生徒参加での語りを伴ったくるみ割り人形。後半はステージ大活躍のリズミックな曲目にパーカスが加わり、迫力満開！学生達はいつもと違うコンサートに大喜び
平成 21 年 大垣市スイトピアセンター音楽堂 K オケ ステージ 3 台とピアノ	大垣音楽祭 かすみの会コンサート ～K オケ～ このコンサートが、K オケ(一人が単旋律を受け持つ)旗揚げコンサート 3 台のステージでのアンサンブルは聴衆に温かく受け入れてもらえた ヴィヴァルディ：四季より「春」 ヴァイオリン 天野千恵 J.S. バッハ：チェンバロ コンチェルト BWV. 1054 モーツァルト ピアノコンチェルト KV414 グリーク：ホルベルグ組曲



電子楽器開発者から見た電子オルガンアンサンブル

宮城雄介(株式会社コルグ)

私が初めて電子オルガンアンサンブルを聴いたのは比較的最近ですが、電子ピアノ開発者&クラシック音楽愛好家として「憧れにもなり得る交響曲などの管弦楽曲を、編成しやすい人数で演奏出来る」という点に非常に感動した覚えがあります。現状は電子オルガンアンサンブルの存在のメリットのひとつにオーケストラの経費削減という見方もありますが、将来的には一つのジャンルとして確立する可能性も感じますし、「一般家庭で交響曲、協奏曲が弾ける」環境を想像させてくれる非常に良い試みだと嬉しく感じました。しかし、同時に現状では課題と思われる部分もあり、特に再生系、表現、独自性の3点で課題があるのでは？と感じています。

一つ目は再生系、つまり音の再生に関するものですが、現状は3~5台のスピーカー構成を良く拝見しますが、そもそもこの台数の制限が音像の偏りを生み、生音の(個人的には1番と思う)良さである音に囲まれる感覚が非常に薄くなっています。スピーカー数を増やす、フラットパネルスピーカー(ユニットを板に張り付けて、その板自体を振動させ発音させる、まるでピアノの響板を連想させるシステム)の導入などの対処療法はありますが、例えオーケストラメンバーと同じ数のスピーカーを用意した所で、指向性などの関係から、出音や反射音も含めて生音とはイコールにはなりません。ニアリーイコールにするためには、私が考えるにイオンスピーカ原理を応用するなどして、コーンを振動させず空気自体を振動させる様な音振動システムを確立しスピーカー構造の脱却を図る、または空間系のモデリング処理(発音体から人間の耳までの音振動の信号処理)などがあると睨んでいます。しかし、現実的解決にはまだまだ時間のいる問題でしょう。

二つ目は表現ですが、擦弦や吹奏といった奏法を持つ楽器音を鍵盤(鍵盤楽器、すなわち打楽器)という異なったインターフェースで完璧に表現を行うための解決案が必要だと感じます。特にヴィブラートでの演奏では、生音との表現の違いが如実に感じられました。Morphing(音と音の隔たりを、音響的に解析し滑らかにする技術。電子楽器としては、Velocityによるサンプリング音の切り替え時などに応用されています)、物理モデリング(物理現象を数式化し、コンピュータを用いてその物理現象を再現させる信号処理技術です。この技術は、楽器の構造や現象が完璧に理解された時、その楽器と同じ音が出せるというスペックを持っており、これからの音源方式として注目されています。余談ですが、特にピアノという楽器に関しては、現代を持ってしても物理的な動きがまだまだ解明しきれておりません)などの技術により音のポテンシャルは上がって来ていますが、こういった所は演奏者というより私達メーカーが努力すべき点でしょう。

三つ目は独自性という事に関してです。電子鍵盤楽器を用いる事によって少人数でオーケストラを奏でる事が可能になりましたが、それ以外ではアコースティックの代用という考えが強い様に感じ、電子による利点が潰されてしまっている様に感じます。もちろん、アコースティックの響きを追求する事は至上命題で各メーカーも苦心している部分であり、それは電子オルガンアンサンブルにも同じ課題だと思いますが、独自音色の使用や、演奏方法はもちろん、スピーカーという発音体を逆手に使い、アコースティックでは不可能な音像空間を創作するのも面白いのではないかと感じます。「ホンモノの再現の追及」、「ホンモノには出来ない何かの追求」。相反していそうなこの二つの事柄を、表現者、開発者ともども追及していけたら、近い将来にこの新しいアンサンブルが想像以上の規模で、想像以上に多岐に渡ったフィールドで、浸透していく様になると思います。

注-1 イオンスピーカー=空気中にイオンを発生させ、そのイオンを振動させる事によって音を発生させる仕組みを持つスピーカー。

注-2 コーン=スピーカーの部品の一部で、ここが振動する事によって音を発生させている。

注-3 Velocity=電子楽器での音量を示す値

上海音楽学院におけるアジア・パシフィック電子オルガン交流週間に出席して

酒井 隆博(昭和音楽大学作曲学科)

6月23日～27日、上海音楽学院で行われたアジア・パシフィック電子オルガン交流週間（即興演奏セミナー、日本、中国、台湾、韓国、アメリカ人による交流コンサート、電子オルガンに関する研究発表、ラウンド・テーブル、日本と中国の学生交流会）に出席できたことは、私にとって大変貴重な時間であり、電子オルガンについて沢山の課題を学ぶ事ができました。

まず始めに驚いたのは、上海音楽学院の学生の音楽に対する意識の高さでした。全てを吸収しようとする気迫にはただただ圧倒されるばかりでした。そればかりではなく演奏面に関して、卓越した技術を持っておりレベルの高さにもとても驚きました。今回、私は上海音楽院の学生、劉丹丹さんと一緒に演奏する機会があったのですが、曲が大変難曲であった為、実質1日で通訳がない状況で完成させる事ができるのか、とても不安でした。しかし、言葉は通じずとも音楽は表現できるものだとして初めて体で実感しました。音楽の素晴らしさを実体験において痛感できた事、海外での演奏経験は私にとって一生の財産になると思います。

そしてこれからの時代を担う私たちが今一番考えなくてはいけないのが電子オルガンの未来とそれに伴う教育についてです。今、中国では「YAMAHA」の電子オルガンに加えて「リングウェ」という会社の電子オルガンが普及しようとしている事を知りました。まだ試作段階の楽器だったが実際、音などもよく中国のハイテクの発展ぶりを目の当たりにしました。価格も安いそうで、これをきっかけに中国の電子オルガン学習者が増えて、「リングウェ」が主流になっていくのかと考えた時、一つの時代転換を感じさせられました。アメリカや日本が長年築き上げてきた電子オルガンの歴史を、一気に崩されてしまうのではないかと感じた位です。そして中国での普及率は楽器だけではなく、演奏を楽しむ一般の方々にも如実に現れていました。上海音楽学院で同時に開かれていた ISME（国際音楽教育学会）のコンサートを見て感じたのが、一般の方々の電子オルガンに対する反応が日本より遥かに高いのではないかと思います。会場全体が一つのエンターテイメントになっており、ステージと客席の温度差が全くありませんでした。

このような状況を受け、日本における電子オルガンはこれからどうすればよいのか真剣に考えなくてはいけないのではないかと思います。今の日本の状況をどう変えていくか、私一人でする事では小さいかも知れないが、何かきっかけを作る事はできたらと考えています。

日本にいただけでは世界における今の電子オルガンの状況が分からなかったのが、今回、これを知ることができた事は、私にとってこれからの課題をはっきりすることにつながり、素晴らしい経験になりました。このような事を真剣に考える事ができたのも上海に行く事ができたからであり、素晴らしい機会を作ってくださった先生方々のおかげだと感謝しています。



将来、これらの貴重な経験を無駄にせず精進していくと共に、上海で築いた華某某、劉丹丹さん達との学生同士の絆を大切に、今回のような各国の演奏会や情報発信をして行ければと考えています。

電子オルガンは私自身をここまで育ててくれた楽器であり、日本で生まれた楽器だからこそ私は一生共に歩んでいこうと思うし、まだまだ沢山の可能性を秘めている楽器だからこそ、その良さを伝えて行きたいと願っています。

写真：劉丹丹さん(左)と筆者

海外情報

以下のアドレスへのアクセスで海外の電子キーボード関連情報が得られます。ご質問・詳細については、事務局の阿方（アガタ）までご連絡ください。

1. 一段電子キーボードによるオペラ“トスカ”および“蝶々夫人”のハイライト 上演

昨年、NHK ニュース「おはよう日本」海外ニュースで紹介されたローマの小劇場「Teatro Flaiano」における Lyric Synth Orchestra（一段電子キーボード4台）による定期上演。
www.classictic.com/jp/Tosca/10949/54477

2. 電子オルガン活用によるソウル国際室内オペラフェスティバル

韓国では電子オルガンアンサンブルによる室内オペラフェスティバルが今年7月11回目を迎えた。韓国のKBS WORLDで電子オルガンに関する記事が掲載。
world.kbs.co.kr/english/cultureenlife/cultureenlife_realfield_detail.htm?...No=1160 - [キャッシュユ](#)

3. TED×USC(南カリフォルニア大学)による Ideas Worth Spreading

TED×USCで Qi Zahng の電子オルガンを取り上げた。彼女は、上海音楽学院電子オルガン科卒、現在、南カリフォルニア大学オルガン科マスターコース在学中)
<http://www.youtube.com/watch?v=iKorq7dE4gM>

事務局からのお知らせ

学会誌『電子キーボード音楽研究』Vol. 5 投稿者募集

学会誌『電子キーボード音楽研究』Vol. 5への投稿者を募集しています。詳細はホームページの学会誌投稿規程をご参照の上、事務局までお問い合わせ下さい。

原稿の種別および字数：電子キーボードを用いた音楽の演奏、創作、教育等に関係する①研究論文（20,000字以内）、②研究報告（10,000字以内）、③会員の活動報告（5,000字以内）、演奏会批評や書評（2,000字以内）、講習会報告、④会の内外の活動や情報についてのレポート。
投稿者：原則として会員とする。ただし依頼原稿執筆者はこの限りでない。

*ご執筆前に事務局に書式見本をご請求下さい。

《編集後記》

第5回全国大会案内号をお届けします。第5回というとひとつの区切りの年といえますが、6年前に準備大会が開かれ、あっという間に過ぎ去ってしまったという感じです。振り返ってみると、いろいろなことが走馬灯のように回ると同時にマンネリ化しつつあるようにも思えます。ニューズレターにも会員諸氏の投稿や編集など積極的参加をお待ちしています。学会というとまず堅苦しい感じをもたれるかも知れませんが、この学会は若い学会として自由にとなたでも参加可能です。よろしく願い申し上げます。(阿方)